

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第3回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成21年7月22日(水) 午後3時30分～午後5時30分	
会場	練馬区役所本庁舎19階 1905会議室	
出席者	委員	米津光治、赤木宏行、杉原 昇、内田秋男、工藤智昭、高橋健司 本間章郎、畑 陽子、難波民雄（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	渡辺浩一 指導主事

1 挨拶

部長

この部会に関しても、子どもたちが学校生活の中でどう育っていくかということが非常に大きなポイントなのではないか。先日までのところを見直し、さらに一步前に進めればいい。

アドバイザー

前回、各小中の実践についてだいぶ紹介いただいたが、実際に報告書作成にあたって、もう少し焦点化していく必要があるかと感じた。

委員

要点録の訂正等について。8ページ、1行目の「20分休みは朝の集会」の「朝の」を取る。5ページ、1行目の中ほど、「大本の」を取る。

2 協議

事務局

本部会で取り上げる内容についての焦点化を念頭に置きたい。体力をどう位置付けていくか、どういうふうな指導の重点項目を絞りこんでいくか。資料の中に、町田市のキャリア教育についての報告書の例がある。これを体力の向上に置き換えて、イメージしていただければ。

委員

昨日は小中の教員が全員集まり、教務関係、生活指導関係、学習、庶務の四つの分科会に分かれた。まず今年度小中合同で実施しようと考えているのが、道徳授業地区公開講座、クリーン運動、児童・生徒の委員会活動の中で、盲導犬の募金活動から交流を図ることになった。それから、月1回1時間、6年生を中学の部活動に参加させる、ほかに書初展と中学の展示会、小学校の展示会に中学の作品を展示できないかという話。ほかに、小学生が中学校に行き、体験授業のように授業をしていただけないかと話をしている。小学生の中学の合唱祭への参加、運動会の持ち方は懸案事項に。避難訓練も一部調整中。生活指導部会では学校のきまりや、職員的生活指導に関する共通理解をどう図っていくかも話し合われた。決まりはすり合わせが難しく、小中ではかなり違うという感覚を持った。また桜小中間のメールを開設し、基本分科会、生活指導分科会のページを作るという話も決まった。

あと、体育朝会の年間指導計画。運動オリエンテーリングの資料。運動会で問題に挙がっているのは、体力の違い。中3と小1を同じには扱えないこと。それから1年生から9年生が全部何かをやるとなると、時間がすごく長くなる。

現時点で体力向上に関わる場所は、6年生の部活が10月から始まること。

委員

私は、これから基本的な考え方をまとめるにあたって、委員のほうでも共通理解を図るため、体力作りについての考え方、原則を私なりにまとめていたものを用意した。それから、品川区では独自に小中一貫教育を進めているが、その中で体力の向上についての資料。本区の子どもの現状と課題とか、それを克服するための考え方だとか。どういう観点で進めていくのか、小中一貫におけるねらいと育てたい力というところでは、具体的な子ども像などもこれから話し合うので、参考になるかと思って用意した。

事務局

本区で出している体力の調査報告書では、体力を二つの視点で位置づけている。1点目は調整力、瞬発力、持久力など運動をするための基礎となる身体的能力、2点目は体の健康を維持し病気にならないようにする体力。これを踏まえて、小中一貫教育における体力向上を図る上で、どう位置付けをするか。運動にかかわる身体的能力に絞るか、身体的能力と健康に生活するための体力を両方取り扱うかどうか。例えば食育等は、健康に生活するための体力も踏まえることになる。まずこのあたりの定義が出発点になると思う。

アドバイザー

体力についていろいろな考え方があるが、一般的には行動体力と防衛体力という考え方があり、これでよろしいのではないか。

委員

もちろん健康に生活するための体力もベースになるが、カリキュラムを考えたときにポイントが絞れるのかと。両方となるとすごく幅が広がり、家庭や地域も巻き込んだいろいろな分野が入ってくる。だからとりあえず体育の授業のカリキュラム作り、運動をするための体力に絞った方がいいと思う。

部長

この委員会というのは2年間か。ほかの委員会も結構幅が広く、バランスを考えると、体育の授業だけでいいのかという気がする。中学校の場合、教科としての保健体育とは、体育と保健の両分野があって、健康維持増進させるための保健の授業であるとか、体育的な知識も扱っている。だとすると、練馬区が基本として位置づけている体力を基本として、考えた方がいいのではないか。例えば2年間であれば、1年ごとに分けて、今年については行動体力、2年目は防衛体力に焦点化していくのはどうなのか。

事務局

報告書は、今年度と来年度と別々に作成する。2年次の報告書は2年間のまとめになる。そういう意味で1年ずつ分けて2年目に2年間の総まとめもできると思う。

アドバイザー

やはり1年目は両方を含めて大枠を作った方がいいのかという気がする。押さえるところを明確にして、2年次以降に具体的な指導方法なり資料なりを提供していくというかたちがいいのではないか。

ただ、ある程度運動するための体力と、健康のための体力の中で特に体育、保健体育の教科でかかわる部分と、学級活動の1、2時間で取り上げるならどんなことかを、1年次の報告書でできるかと思う。あるいは体育分野に特化して、指導資料作りを進めていくと、実際には知的な理解の場が必要になってくるはずだから、それを埋めていくやり方もあると思う。いずれにしても、身体的能力にかかわる部分の体力が、中核にはならなければいけない。

アドバイザー

練馬区の推進している小中一貫教育の体力と云ったら、やはり2本の柱を取り扱っていかなければならないだろう。前回で気になったのは、中学校での体力の育成は、やはり部活動や地域の存在も非常に大きい。そのあたりも視点の中に入れておかないといけないと思う。

事務局

方向としてはこの二つの視点を網羅しながら、中心的には運動にかかわるところも持ちつつも、防衛体力も網羅しながら進めていくという方向性でいきたい。

委員

本区では10年くらい前まで駅伝大会があったが行事の精選でなくなった。何とか継続していけるよう当時のPTA会長に働きかけて、P連主催で中体連の駅伝大会を引き継いでいただいた。結果的に8年目になるが、非常に盛大にできている。できれば小中でできたらという話が一つの発端でもあった。その流れで、学校として皆で取り組める意識や盛り上がりがあるとよい。学校を挙げての体育活動で何かいい方法があるのかと思った。

事務局

学校行事としての取り組みや、部活動も網羅したいということは、当初この小中一貫の体力向上の視点として与えられていた部分である。

健康に生活するための体力は、防衛の体力というアプローチをする場合に、どういう項目やキーワードが挙がるか。体を健康に維持して病気にならないようにする体力という位置付けで、どういう取り組みやアプローチが考えられるか。

委員

区内の小学校では3年生から、中学校は1～3年生まで体力テストをやっている。それをうまく活用しながら、自分の体力の現状をしっかりと押さえていくこと。それから、運動面と知識

理解のところはある程度関連するので、両立させながら進めていくとこと。

今回の報告書では体力を総合的に捉え、初めに視点をしっかりおさえて、具体的な実践例も2年目の報告書の中で触れられていくといいのかと思う。

部長

中学校の保健体育の授業でも体育実技と保健の授業のバランスは、重みの差があるわけで、その配分でいいのではないかと。同等と考える必要はない。健康の保持増進から捉えていくと、児童・生徒の基本的な生活習慣、生活のリズム、食生活も含めた栄養のバランスなども入ってくると思う。そこを考えると、食育、生涯体育というほかに、練馬区の抱えている心の体力、粘り強さ、意志力なども入らないことはないのかという気もする。

アドバイザー

健康に生活するための体力は、座学をイメージしている。体力の向上を図るために食生活とか基本的な生活習慣も関わることを、それぞれの段階で子どもたちに理解を図らなければ、主体的に取り組むことができない。そして身体的能力は実際に体を動かしたり、人とかかわりながら運動の楽しさを味わうというアプローチをイメージしている。体育でも保健でもどこの場面でアプローチするかが出るといい。

事務局

運動の実践ばかりではなく、座学等による知識の習得も並行して行うということ。

スポーツテストの結果を分析するなど、知的な理解というキーワードをいただいたが、どの学年で何に取り組むかの体系化が必要。また、中学校の今度の指導要領からも保健分野と体育理論など座学的な部分も網羅していくことになるのかと思う。

委員

体力調査の報告書を見ると、かなり幅広いアプローチがあるが、やはり初めに「運動をするための体力」、次に「健康に生活するための体力」は学校側として意図して指導していかななくてはいけない、授業として取り組まなければいけない内容だと思う。そのほかに、「地域：運動遊びの場づくり」だとか、「家庭：運動習慣・生活習慣の確立」、これは実際の指導より、例を挙げて家庭や地域を啓発していくことだと思う。それを考えると、やはり授業として体育の部分プラス保健としての柱があって、9年間を見通して自分の体に関する知識をつける。その時期、その分野で押さえておくべきことを示しながら、さらに体育行事の工夫だとか、各校で工夫できることを脇に書けるようなものが資料としてのイメージ。

まず体育の授業をベースとして、子どもの体力を育て、さらに知的なもので「健康に生活するための体力」を育てる。そしてその他の環境づくりとしての提言を参考にしながらまとめていけたらいいのかと思う。そのあとは、練馬区の現状からどういう運動を取り上げたら、現状がさらに向上するのかを例示しながら、焦点化できるといい。体力報告書は多岐に渡って網羅しているが、系統だっていないため、学校では資料になりにくい。それをこちらのほうで、ある程度絞って見やすくできる方法があればいいと思う。

委員

今、学校の中で何ができるか。運動するための体力を学校で育てていくには、教科体育、教科外の体育的な活動、部活になる。そして健康に生活するための体力は、先ほどから挙がっているもののほかに、学活の時間の保健指導、給食指導、心の問題が必要なことだろうと。

もう一つは、子どもたちのボトムアップを図らないと。運動好きな子は技能がものすごく上手になっている。ただ、まったく運動しない子をどういうふうにしていくのか。それを考えていかないと体力の向上は図れない。学校体育のこれからの大きな使命だと思う。

事務局

運動のどこにポイントを置くか。一応健康に生活するための体力という視点で、体力の知識、生活習慣、栄養や休養や睡眠等を視点として押さえられればと思う。

委員

健康に生活するための体力というけれど、知的な理解の部分が大きい。そこから生活するための実践力を引き出していく。その知識をいかに日常化して実践力に変えていくかが大事。また、運動能力は高くなくてもあまり病氣しない人は、自分の体に対する知恵とか、一定の何か決まった実践をしているのだと思う。それを子どもの中から引き出して、知恵や実践力として身に付け、実際に実行できるものがないとだめだと思う。

部長

結局、知識を活用し、子どもたちが意欲的に主体的に動かなければ意味がない。だから、運動的なものに関しては何を高めるのかという視点でいいだろうし、もう一つは、その知識をどう活用し、主体的に活動させていくのかというところで捉えていけばいいと思う。

それから体力的なもの、実技的なものに関しては、練馬区の子どもたちの弱点をある程度焦点化する。そして今回の小中一貫教育の中で、練馬区の課題が克服できていることがある程度実績として残れば、成果が上がってくると思う。

事務局

体育の運動について、範囲が広いがどこに絞り込めるのか。体づくり運動の小学校から中学校への接続、カリキュラム作りについてはいかがか。なかなか1年目にすべて網羅することも難しいので、体づくり運動が一つの切り口であると思う。

部長

基本的に、中学校の体育の授業での体づくりとして、現場の体育の先生の捉え方は、主運動の特性に合わせた補強運動としての体づくりという考え方が非常に多い。練馬区の児童・生徒の体力的な弱点を、9年間のスパンで補っていくための体づくりをカリキュラムとして組んでいくという発想でいいか。

事務局

今度の指導要領でも中学校では7時間以上の体づくり運動を、という流れもある。一つは単

位時間の体づくりを小学校から中学校に接続していくカリキュラム作りという視点。いろいろな運動例を抜き出して、各単元の初めに行う体づくりの事例などにも応用は可能か。

委員

去年、小学校の場合は敏捷性、全身持久力、跳力、投力を高める運動、中学は、持久力、跳力、投力を高める運動を意図的、継続的に実施していくことが必要であるという報告が出ている。やはり体づくり運動を通して、これらに関わる運動に計画的に取り組み、9年間でどのように高めていけるかが理想だ。ただ、体づくり運動だけで1単位時間の授業をやるのは難しい。ただ、やらないものを提示できないと思うので、実践、検証してこれならいけるというふうにならないと、資料として載せられないと思う。

取り組み方は、9年間見通した中で、体育の授業で向上が図れる運動の例を出せばいい。

委員

小学校では主運動の補強というかたちではなく、体づくり運動をすること自体が一つのねらいになっている。それから、何年くらいから数値や運動のしかたやめあてを理解して運動ができるのか。子どもの発達段階に応じた学び方や運動の与え方も問題になってくると思う。

5年生を担当していると、自分の数値は気になるが、それを高めるための運動のしかたは、提示してやらないと無理だと思う。

事務局

中学校では帯のように、それぞれの種目で取り扱っている実態が多い。ただ、今後改善しなくてはならない視点もあって、それが他の中学校等で実践事例として、提示できるものにはなるのではないか。実態として体づくりの位置付けについて、小中の取り組みに段差がある中で、これを1単位時間の取り組みとしたカリキュラムの作成は取り組みとしてどうなのか。

アドバイザー

まとめて単位時間で実施しても、それで子どもの体力の向上が図れるわけではない。結局子どもがそこで体験し、学んで実際の自分の生活の中に取り入れ、活用していくことが必要。

例えば小学校の低中学年では筋力の向上はねらわないだろうから、発達段階に合わせて特性を踏まえた体づくり運動の体系化が必要。もう一つは、投力。これは明らかに経験、投げ方の問題。ある程度早い時期にきちんと教えなければ投力は上がらない。こういうことは低学年でも取り組めるし、だからそこに特化する。区としての課題についての解決策は、この委員会としては当然触れていかなくてはいけない。

事務局

今の実態に合わせてどういうことが必要か、また指導要領の中でも、特に重視するようになるといふこともあるので、それと区の実態を併せながら、体力向上につながる体づくりの運動実践とカリキュラム化していくことは非常に意義のあることではないか。

委員

3期の捉え方について、例えば体づくりで重点化する運動は何かとか、それを提示して運動例、授業例を紹介し、特に練馬区のマイナス面を解消するためにはこういう取り組みがいいということがあれば、筋は通っていると思う。そうすると、真ん中の時期の小5、6、中1のところはどうなるか。この外枠が見えれば、方向性は見えてくるのではないか。具体的な原稿作成の中で課題が出てくると思うので、分担しながら作業を進めていったらどうか。

事務局

今までの話から、大きく3点。授業にかかわるところと、部活動と学校行事というアプローチの中で、体力の向上をカリキュラム化していけるのではないか。

委員

部活動には文化部的なものもある。これは運動部を中心に、どれくらい体力向上に役立つかということか。漠然といいとは思いますが、運動嫌いな子は運動部には入らない。底上げというよりも好きな子をさらに伸ばす場だ。その位置付けが見えない。

アドバイザー

検証は難しいが、中高で運動部活動に入っている子どもとそうでない子どもの体力には明らかに差がある。小中の一貫教育の指導資料としての部活動のあり方とか、地域やPTAと協力した部活動の活性化の方法というようなものではないか。教育課程の中に位置付けられたものがメインになるだろうが、運動部活動については外せない。今回の指導要領の中では初めて運動部活動についても明文化されている。

部長

一概には言えないが、中学校の部活動は生活指導部の中に部活動担当の分掌をしているところが多い。

アドバイザー

部活は、顧問がサービスでやっているという誤解が時々ある。これは明らかに学校が計画する教育活動で、学校が責任を持って計画をして実施していく。

事務局

本日は、授業、部活動、学校行事という三つの焦点化。あとは本部会としての体力の位置付けがある程度焦点化できたのではないか。今後いろいろと作業していく中で、それぞれ役割を分け、何ができるか報告書をまとめていけたらと思う。授業について、今年度は体づくりですすめたい。

アドバイザー

今日の資料に町田のキャリア教育のカリキュラム案がある。やらなければいけないのは、一つは左側の学習期で目指す子どもの姿をまず固めることである。その上で内容として、例えば

教科、特別活動、学校行事、部活動のようなことがア、イ、ウ、エに入り、どんな内容項目、指導の場面があるのか。もう一つは、一番右側の全部の教育活動を通して子どもに経験させた
いことを埋めていかなければいけない。だからまずは一番左側が大事かと思うがどうか。

委員

1期、2期、3期の、目指す児童像みたいな感じで。

アドバイザー

たぶん自分の学校の部分は得意だが、それ以外は難しいかと思うので、今回は最初に小中それぞれのイメージをすり合わせたほうがいいかなと思う。

事務局

次回1期から3期で育てたい子ども像を煮詰めていきたい。9年間というスパンで見ただいて、それぞれで実態やねらい、目指すところを次回持ち寄って皆さんで検討して、外枠を固めていきたい。

アドバイザー

完成された文言でなくても、課題みたいなものでもいい。その中からこの委員会としてまとめていくと、具体的な子どもの課題が見えるのではないかな。

最終的には1期、2期、3期の姿を描かなくては行けないが、それを具体的に描くのは校種の違いもあり大変。それぞれの学年で発達段階の課題になっていることを挙げていただくと、より鮮明になると思った。

*次回日程：8月25日 東庁舎301会議室